

# 呉晗と『海瑞罷官』

## ——『海瑞罷官』の執筆意図

瀬 戸 宏

はじめに	257
I 呉晗という人物	258
II 『海瑞罷官』執筆と上演・出版過程	260
III 歴史劇論争での呉晗の主張	262
IV 姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」とその反響 .....	264
V 『海瑞罷官』の内容と芸術価値	268
結 語	272

### はじめに

---

呉晗<sup>(1)</sup>と彼が執筆した京劇戯曲『海瑞罷官』は、姚文元の批判「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が文化大革命の直接のきっかけとなったこともあり、広く知られている。呉晗と『海瑞罷官』を巡っては、すでに多くの文章が書かれている<sup>(2)</sup>。近年の日本でも、比較的人目に触れやすい媒体で次の文章が書かれている。

時の流れは必ずしも毛沢東の個人独裁体制へという一方的なものではなかった。文芸の世界ではこれに対する反骨精神もみられた。(中略) そうした言説の典型といえるものが、呉晗の『海瑞免官』と題する京劇脚本であった。明代の清廉な官僚の海瑞が正しい政策をとったところ、それが皇帝の怒りを買って免官させられるという筋書きであり、これはまったく廬山会議の彭徳懐事件をあてこすった内容であった。<sup>(3)</sup>

文革の直接の発端は、1965年11月に上海の新聞『文匯報』に掲載された姚文元の

文芸評論「新編歴史劇『海瑞免官』を評す」である。論評の対象になった『海瑞免官』は元来、高官緑者の悪事を暴き皇帝を諫めた海瑞という官吏が逆に皇帝の怒りを買って罷免されたという明代の故実を題材にした史劇であり、北京市副市長でもあった歴史家呉晗が1959年に発表した文芸作品であった。<sup>(4)</sup>

結論から先に言えば、引用した二つの文章はいずれも呉晗の戯曲『海瑞罷官』の内容を正しく伝えていない。本稿では、まず歴史学者呉晗がなぜ京劇戯曲『海瑞罷官』を執筆したか、その背景を探り、次に『海瑞罷官』に対する通説が正しいか改めて検討し、さらに『海瑞罷官』の京劇戯曲としての芸術価値を考察することとしたい。

## I 呉晗という人物

---

まず、呉晗の略歴を整理しておこう<sup>(5)</sup>。

呉晗は1919年8月11日浙江省義烏市に生まれた。呉晗の父親は警官で家庭は豊かではなく、しかも呉晗が中学卒業時に病気となり、呉晗は生活維持のため小学教員となった。しかし呉晗の向学心は衰えず、1927年杭州のキリスト教系大学である之江大学に入学する。入学後之江大学が一時閉校になり、上海の中国公学に転学、当時の校長胡適に目をかけられた。1930年の卒業後、燕京大学図書館中日文編考部職員となるが、翌1931年胡適の推薦により清華大学歴史系に転学生として再入学した。1934年清華大学卒業後、成績優秀のため大学に残され教職に就き明代史を担当した。1936年、雲南大学に招かれ、1937年抗日戦争勃発直後に同大学教授となった。

この頃までの呉晗は、胡適の影響下で実証を重視する歴史研究者であった。しかし呉晗の思想は、抗日戦争期に大きく変化する。戦争勃発によって昆明に現地移転した北京大学・清華大学・南開大学は西南連合大学を開設するが、呉晗はまず西南連合大学の非常勤講師を務め、続いて西南連合大教授となった。抗日戦争という空前の民族危機の中で呉晗は積極的に時局に関与するようになり、急速に国民党に対して批判的となり、1943年には中国民主同盟(民盟)に参加した。1944年には民盟中央執行委員に選出され、呉晗は聞一多、李公朴とともに、雲南での民盟の重要な活動家となった。国民党への反発から、中国共産党に対しては好意的になり、雲南での共産党文献学習会などに参加している。また、この時期に清華大学の同学であった袁震と結婚している。袁震は病弱で子供を作ることが出来なかった。呉晗夫妻の子は、すべて養子である。

1946年5月、妻の病気治療のため昆明を離れ、重慶を経て上海に至った。ここで李公朴、

聞一多暗殺を知り、衝撃を受ける。西南連合大学廃止にともない8月には北平（北京）に行き清華大学に勤務する。民盟北平分会主任委員も務めた。1948年には、彼の学術上の代表作とされる『朱元璋伝』を刊行している。同年秋、国民党の迫害から逃れるため解放区に行き、西柏坡で毛沢東と面談した。人民共和国建国前夜の呉晗は、中国共産党から強い信頼を寄せられていたことがわかる。

1949年1月、人民解放軍と共に北平に入り、北京大学、清華大学の接収に参加した。清華大学で校務委員会副主任、文学院院长、歴史系主任に任ぜられた。同年11月には、幹部不足のため北京市副市長に任命され、教育・衛生を担当した。その他北京市政協副主席、中国科学院哲学社会科学部学部委員、民盟中央常務委員、同北京市委員会主任委員などの職務にも就いている。

1950年代の呉晗の立場は、中国共産党に忠実な党外民主人士であった。人民共和国建国後の歴史家としての業績には、『資治通鑑』標点本刊行、定陵（明十三陵）発掘指揮、「中国歴史小叢書」「外国歴史小叢書」主編、『朱元璋伝』改訂版刊行などがある。このほか、北京市副市長として北京城壁取り壊しに関与した。定陵発掘と北京城壁取り壊しは、今日でも評価が分かれている<sup>(6)</sup>。

呉晗に対する中国共産党の高評価は建国後も続き、1957年3月に呉晗は中国共産党に入党している。当時は非公開で後に公開党员となった。共産党入党が刺激となったのか、反右派闘争に積極的に参加し共産党に呼応して民盟幹部の立場で章伯鈞・羅隆基らを公開批判した。呉晗は、民盟の中で最も痛烈に章伯鈞・羅隆基らを攻撃した一人であった。たとえば、1957年7月の全人代での発言は、「個人的野心があり、人格低劣な章羅」<sup>(7)</sup>などの人格攻撃を含むものであった。国家幹部だった章伯鈞、羅隆基への処分は比較的緩く、北京に留まることを許され民盟を除名されなかったので、呉晗と章伯鈞、羅隆基は反右派闘争後の民盟の会合で同席もしたが、彼らはお互いに視線も合わさなかったという。

1959年末から、北京京劇団の依頼で後に呉晗の運命を決定づけることになる京劇劇本『海瑞罷官』を執筆開始した。1961年2月から北京京劇団で上演され、『北京文芸』1961年1月号に戯曲が掲載された。また1961年10月より鄧拓、廖沫沙とともに呉南星の筆名で北京市委刊行物『前線』に交代で「三家村札記」を64年7月まで連載した。

1965年11月10日、姚文元「新編歴史劇“海瑞罷官”を評す」が発表され、呉晗の運命は暗転した。厳しい批判に直面した呉晗は、1966年3月北京郊外の農村（昌平県大東流村）に行き、四清運動に参加した。これは、実際には呉晗を批判から保護するものであった。しかし1ヶ月とたたずに市区に連れ戻され、批判会で批判されるようになった。初期はまだ会議での批判だったが、7月からはつるし上げ（批闘）に変化し、8月以降は批闘のた

びに暴行を受けるようになった。呉晗は著名人のため、ほとんど毎日北京各地各所の批闘会に引き出され、最も多い時は1日に8回批闘会で批判されたという。

その後1968年3月には「叛徒」の罪名で逮捕され、秦城監獄に投獄された。1969年10月11日死去した。死因は不明で、遺骨も今日に至るまで行方不明という。

悲惨な運命は呉晗一人に留まらなかった。1969年3月18日には、妻の袁震が迫害で死亡した。1975年9月、娘の呉小彦は父の名誉回復要求の手紙を出し姚文元批判を口にしたため逮捕投獄された。彼女は獄中で迫害を受け精神に異常をきたし、1976年9月23日、精神病院で自殺した。一家でただ一人生き残ったのは、息子の呉彰だけであった。

11期3中全会後の1979年7月、中共北京市委は呉晗の名誉回復を決定した。同年9月14日、呉晗、袁震の追悼会が開催された。『海瑞罷官』も、再出版・再上演された。

2009年に、10巻本『呉晗全集』（常君実編、人民大学出版社）が刊行された。ただし、反右派闘争時の文章、講話類および一部の行政文書は未収録であることが明記されている。

## II 『海瑞罷官』執筆と上演・出版過程

『海瑞罷官』は第5節で詳しく紹介するように、明代の剛直で清潔な官僚海瑞（1514～1587）がその性格ゆえに罷免された事績を描いた京劇戯曲である。呉晗はなぜ『海瑞罷官』を執筆したのか。話は1959年にさかのぼる。

同年4月2日、毛沢東は中国共産党中央8期7中全会開幕日に参加者への娯楽に上演された湘劇『生死牌』（劇の最後で無実の女性に代わった娘がまさに処刑されようとする時海瑞が現れ、事件を解決する）を観て海瑞に興味を持ち、明史を取り寄せ海瑞伝を読んだ<sup>(8)</sup>。4月5日、毛沢東は8期7中全会の講話で、「皆さんの欠点を私は批判する。私の欠点を皆さんも批判しなさい。私は『明史・海瑞伝』を彭徳懐同志に送って読ませた。同時に、あなた（周恩来を指す）にも読むよう勧めたい。海瑞があんなに鋭いのをみてほしい。皇帝にあの手紙を送った。とても遠慮が無い」<sup>(9)</sup>と述べ、海瑞の実直であえて直言する性格を賞賛、海瑞の学習と宣伝を提唱した。中共中央宣伝部副部長の胡喬木は明史専門家である呉晗に、『人民日報』に海瑞に関する文章を寄稿するよう依頼した。胡喬木はこの時、海瑞宣伝は毛沢東の提唱だと呉晗に明言したという<sup>(10)</sup>。

毛沢東の提唱であることが呉晗の執筆意欲をかきたてたのか、呉晗は「海瑞皇帝を罵る」（『海瑞罵皇帝』『人民日報』1959年6月16日、筆名劉勉之）を皮切りに「海瑞の物語」（『海瑞的故事』『新観察』13期）、「清官海瑞」（『北京日報』1959年7月22日、筆名劉彦）、「論海瑞」（『人民日報』1959年9月21日）、「海瑞」（『新建設』1960年第10、11期）を次々に

発表した。

この間、1959年7、8月の廬山会議（7月2日～8月1日中共中央政治局拡大会議、8月2日～8月16日8期8中全会）で大躍進政策を批判した彭徳懐らが失脚した。毛沢東は廬山会議で再び海瑞に触れた。この時は“假海瑞”“右派海瑞”ではなく、“真海瑞”“左派海瑞”の提唱を提起した<sup>(11)</sup>。呉晗は、9月21日発表の「論海瑞」では、右傾機会主義批判を文末に付け加えている。

呉晗の度重なる海瑞関連エッセイ発表などで、海瑞ブームが起きた。ここから、呉晗が予想していなかったことが起きた。「論海瑞」を読んだ北京京劇団団長で著名な京劇俳優の馬連良が、同年10月呉晗に海瑞劇の執筆を依頼したのである<sup>(12)</sup>。馬連良は、かつて修業時代に『大紅袍』という海瑞劇を演じたことがあった。清廉潔白な海瑞は、死後に赤い袍しか残さなかった、という内容である。馬連良は民盟同盟員でもあった。折しも、上海で上海京劇院による海瑞劇『海瑞上疏』が周信芳演出・主演で9月30日より上演され好評を博していた。『海瑞上疏』は、海瑞が友人などの制止を振り切って嘉靖帝に手紙を送り嘉靖帝の浪費などを戒め、帝の怒りに触れて投獄されるが、まもなく嘉靖帝が急死したため許される、という史実を劇化したものであった。『海瑞上疏』も、海瑞宣伝のために別の中共中央宣伝部副部長の周揚が上海京劇院に依頼したのだった。『海瑞上疏』成功も、馬連良が呉晗に海瑞劇執筆を依頼する一因になったと思われる。

馬連良の依頼に、呉晗は京劇の素人だからとためらったが結局引き受け、59年末から海瑞劇の執筆を開始した。海瑞が嘉靖帝を批判して罷免・投獄された物語はすでに『海瑞上疏』があるので取りあげず、その数年後の地方悪徳官僚への懲罰と彼らが農民から没収した土地の返還を実行して地方官僚の反撃を招き罷免された故事を描くことにした。草稿を書き上げるごとに京劇専門家の意見を求め修正を重ね、1960年11月第7稿が完成した。当初の題名は『海瑞』であったが、友人の提案<sup>(13)</sup>により『海瑞罷官』とした。

戯曲『海瑞罷官』は『北京文芸』1961年1月号に発表された。歴史劇と言う副題が付されていた。文末には、1960年11月第7稿とある。そして『海瑞罷官』は1961年2月11日（旧暦12月26日）、北京虎坊橋の工人倶楽部で北京京劇団によって初演された。上演広告にも、歴史劇とあった。上演直前の2月7日付『北京日報』・『北京晩報』はいずれも春節に向けての新作予告として『海瑞罷官』をとりあげ、上演の雰囲気盛りあげた。上演広告によれば、執行導演（演出）は王雁で、海瑞は団長の馬連良が演じ、裘盛戎が徐階に扮した。周和桐、馬盛龍、李淑玉、慈少泉、李毓芳、李多奎も出演していた。広告には馬・裘以外の配役は明記されていないが、王雁によれば、李多奎が海瑞の母、周和桐が戴鳳翔、李毓芳が海瑞の妻という<sup>(14)</sup>。

初演後の2月16日、『北京晩報』に繁星（廖沫沙）「“史”と“戯”——呉晗の“海瑞罷官”上演を賀す」が掲載されたほか、『北京日報』、『北京晩報』その他には海瑞紹介記事、舞台写真、劇評が掲載された<sup>(15)</sup>。新作上演として、ひとまず成功であったといえよう。新聞劇評の多くは著名な学者が歴史劇を書いたことを賞賛するものであった。1961年11月、更に部分改訂した『海瑞罷官』単行本を北京出版社から刊行した。序を新たに書き下ろしたほか『明史』などから抜粋した歴史資料「海瑞罷官本事」が付いており、これが『海瑞罷官』の定本となった。単行本も、歴史劇という副題を表紙に刷り込んでいた。『北京文芸』初出テキストと北京出版社版単行本は、基本内容は同一である。

上演広告によれば、『海瑞罷官』はその後2月17日、2月20日、4月1日、4月9日に上演されている。4月に上演されたのは、江青が3月に『海瑞罷官』を観たいと求めたからと言う<sup>(16)</sup>。江青は劇を観て問題があると感じ、『海瑞罷官』を批判するよう求めたが、北京ではことごとく拒否された。これが、後に上海で姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」を準備することに繋がっていく。

### Ⅲ 歴史劇論争での呉晗の主張

歴史劇論争とは1960年下半期から1961年上半期にかけて新聞、演劇雑誌で繰り広げられた当時上演の歴史劇をめぐる論争である。論争は京劇など伝統演劇の新編（新作）歴史劇から『甲午海戦』『胆剣篇』など話劇の歴史劇、さらに『昭君出塞』『漢秋宮』などの古典劇にまでおよんでいる。歴史劇は反右派闘争・大躍進を経て政治運動への従属を強制され窒息状態にあった1960年前後の演劇界にあって、当面の政治課題と関わらないためある程度芸術性を備えた作品を創り出すことができた分野であり、活発な討論がおこなわれた。主な発言は戯劇報編集部編『歴史劇論集第一集』（上海文芸出版社、1962年11月）に収録されている。討論内容は、歴史劇の教育作用、歴史的眞実と芸術的眞実の関係、封建統治階級の英雄人物をどう評価するか、人民大衆の歴史上の役割をどう評価するか、など多岐にわたっている。呉晗は自ら歴史劇である『海瑞罷官』を執筆したこともあり、積極的に発言した。歴史劇論争の全貌を紹介すること<sup>(17)</sup>は別の機会に譲り、ここでは呉晗の歴史劇論争での発言に絞って検討しておきたい。発言時期が『海瑞罷官』発表前後で、その内容が『海瑞罷官』執筆と密接に関わっていると思われるからである。呉晗が重視したのは、歴史的眞実と芸術的眞実の関係すなわち芸術性のために歴史事実を変更したり虚構性を加えても良いのか、という点であった。

呉晗は、『海瑞罷官』発表直前の1960年12月25日に発表した「歴史劇を語る」<sup>(18)</sup>で、史

料で確認できる歴史事実に基づく歴史劇と、そうではない劇を区別することを提唱し、両者の違いを『楊門女将』など楊家将ものの劇を例にとって説明する。

楊家将ものの劇は、私は観るのが好きである。(中略)しかし、私が歴史の角度からこの劇を評価するのは困難である。これらの劇は歴史劇の範疇に属するものではないので、歴史劇とみなすことはできないのである。(中略)余太君、穆桂英、楊排風らの人物は演劇人が作り出したもので、歴史からは根拠を見つけ出すことはできない。人物だけではない。(中略)筋のすべては演劇人の虚構であり、歴史に根拠を見つけ出せないのである。人物に根拠がなく、筋に根拠がない。どうして歴史劇と呼べるだろうか。<sup>(19)</sup>

これら(楊家将ものなど——引用者)は歴史劇とみなすことはできない。何とみなすのか。物語劇(故事劇)とみなすべきであろう。(中略)もう一種は神話劇である。たとえば『封神榜』『西遊記』(中略)の類である。歴史劇については、神話劇とは違い、物語劇とも本質的な違いがある。<sup>(20)</sup>

呉晗は、歴史事実に基づかない劇を否定はしないが、歴史学者としてそのような劇が歴史劇と呼ばれることに反対した。そして歴史劇の定義を次のように述べる。

歴史劇は必ず歴史上の根拠がなければならない。人物、事実にみな根拠がなければならない。歴史劇の任務は、歴史の実際の状況を反映し、その中から有益ないくつかの教訓をくみ取り、広大な人民に歴史主義愛国主義の教育をおこなうことである。<sup>(21)</sup>

呉晗はまた、歴史と歴史劇を区別することも提唱する。

同時に、歴史劇は歴史と異なり、両者は区別がある。(中略)歴史劇の劇作家は時代の真実性の原則に違反せず、この時代に起こるはずのないことは書かず、書くのは歴史人物が活着している時代に完全に起こる可能性があることだという原則の下で、劇作家は十分に虚構の自由があり、物語を作り、染め上げ、誇張し、際立たせ、芸術上の完全な要求に到達させるのである。<sup>(22)</sup>

『海瑞罷官』が発表、初演されて数ヶ月後、呉晗は再び「再び歴史劇を語る」<sup>(23)</sup>を発表し、

次のように述べた。

歴史劇は歴史の大筋、節目の基本状況に注意し、歴史の真実にかなり合致させるよう努めなければならない。歪曲、捏造は許されない。たとえば、旧時代の地主階級の歴史家が農民蜂起を歪曲、侮蔑したことに対して、必ず階級分析の方法を用いてその本来の姿に戻し、その正義の正確な一面を肯定しなければならない。しかし、任意に美化し、古代の農民戦争を現代化し、現代の思想意識（当時の人が持つことが不可能な思想意識）を古人に無理に加えては絶対にならない。このような行為はまったくよいところがない。たとえ主観的な意図がよくても、効果は逆に有害なのである。<sup>(24)</sup>

このように呉晗が強調したのは、歴史劇での歴史事実の尊重であった。歴史劇の虚構性は否定しないが、その場合もその時代に起こりうる事実に限定されなければならない。『海瑞罷官』に『北京文芸』での初出、単行本、上演広告のすべてに歴史劇という副題がついていたことは、すでに確認した。呉晗が『海瑞罷官』を歴史劇という自覚のもとに執筆したことを明確に示している。呉晗の歴史劇論争での立場を考えれば、歴史劇とは歴史的真実を舞台に載せることであり、歴史的事実から離れた影射（あてこすり）はしてはならないことであった<sup>(25)</sup>。

#### IV 姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」とその反響

『海瑞罷官』発表・上演から4年以上たった1965年11月10日、姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」<sup>(26)</sup>が突然上海『文匯報』に発表された。「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が、毛沢東・江青らの意を受け極秘で準備されたこと、「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」発表が文化大革命の発端となったことは、すでに広く知られており、ここでは繰り返さない。姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」の具体的内容を確認することにしよう。

姚文元はまず、呉晗は1959年以来多くの海瑞に関する文章を書き、さらに1961年には『海瑞罷官』を完成し、「さらに序を書いて再度みんなに海瑞の“よい人格”を学ぶよう求めている」と指摘する。そして『海瑞罷官』の中で描かれている海瑞の主要な事績は、地方官僚が農民から奪った土地を農民に返還させる“退田”と冤罪を被った民衆を救う“平冤獄”である、と要約する。

劇の中で、肯定的人物として登場するのは海瑞一人だけである。農民は消極的に大



旦那様に向かって冤罪を叫び、“旦那様が私たちの主となり”、自己の運命を“海青天”に託すことができるだけである。

そして姚文元は、『海瑞罷官』に描かれた海瑞はニセ海瑞であるとする。「海瑞は根本的に農民と地主の矛盾を解決しようと考えたことはない。彼はこの矛盾を緩和しようと考えたに過ぎない」と彼から見た海瑞の人物像を整理する。姚文元によれば、海瑞が大地主に反対した目的は、農民と地主の矛盾を緩和させることによって地主の農民への支配を強固にし、明朝を安定させようとしたことにあるのである。「海瑞を農民の利益の代表として描くことは、敵と味方を混同し、地主階級独裁の本質を抹消し、地主階級を美化するものである。」

そして姚文元は中国が社会主義社会となった現在、“退田”や“平冤獄”を学ばせる“現実意義”はどこにあるのか、と問いかけ、『海瑞罷官』の問題を次のように整理する。

1961年、我が国が3年続きの自然災害で暫時の経済困難にあった時、帝国主義、各国反動派と現代修正主義が何度も反中国の高まりを創り出していた状況下で、牛鬼蛇神たちは“単干風”“翻案風”を吹かせていた。彼らは“単干”の“優越性”を鼓吹し、個人経済の回復を要求し、“退田”を要求した。すなわち人民公社の土台をこわし、地主富農の罪悪の統治を復活させようとするのである。あの旧社会の中で労働人民に無数の冤罪を創り出した帝国主義者や地主・富農・反動派・悪人・右派分子は、冤罪を創り出す権利を失った。彼らは打倒されたことを“冤罪”だと思い、大声で“冤罪を晴らす”よう叫び、彼らの利益を代表する人物が出てきてプロレタリア独裁に敵対し、彼らのために不平を抱き、彼らのために“名誉回復”し、彼らを再び政権の座に就かせることを望んでいる。“退田”や“平冤獄”は、当時ブルジョア階級がプロレタリア独裁と社会主義革命に反対する闘争の焦点であった。

最後に、姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」は結論を下す。

私たちは、『海瑞罷官』は決して芳しい香草ではなく、毒草である、と考える。

このように、姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」の批判の焦点は“退田”と“平冤獄”であった。姚文元は、“退田”は“単干風”を、“平冤獄”は“翻案風”を示唆しており、『海瑞罷官』の内容は“単干風”“翻案風”を積極的に肯定することに等しいと批判

したのである。“単干風”“翻案風”は、1962年に年初の7千人会議を経て調整政策が本格化し、“三自一包”（自留地、自由市場、自負盈毀、包産到戸）といわれる農村での自由化政策と、右派分子らに対する名誉回復が本格化したことを、後になって批判したものであるが、意見としては1961年にすでに現れていたようである。調整政策の主要な推進者は劉少奇・鄧小平であるから、「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」は、すでに多くの指摘があるように、呉晗を批判することによって、その直属の上司である彭真を批判し、さらにその上にいる劉少奇批判を狙ったものであることは、明らかであった。

『海瑞罷官』に“退田”と“平冤獄”が肯定的に描かれているのは事実である。だが、それが1960年代の農村自由化政策や右派分子などの名誉回復を賞賛したことになるのか。呉晗の歴史劇論争の発言をみても、明代の歴史を離れた読み方を読者・観客に求めたとは考えにくい。しかも『海瑞罷官』はそれらの政策が提起される以前の1960年に執筆され、1961年初頭に発表・上演されているのである。

しかし、1965年末の中国の思想状況は、もはや理性的討論が可能になるものではなかった。「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が文匯報で発表された後、華東地区の新聞はただちに転載した。北京の新聞は彭真らの抵抗ですぐには転載しなかったが、結局11月29日に『解放軍報』、30日に『人民日報』、12月1日に『光明日報』と次々に同論文を転載し、『海瑞罷官』批判の重要性を示した。公式刊行物で自己の作品が“毒草”と名指しされるという強い圧力の中で、呉晗は長文の「『海瑞罷官』についての自己批判」<sup>(27)</sup>を執筆し、1965年12月27日付『北京日報』に掲載された。作品に描かれた隆慶3（1569）年前後の江南での“退田”“平冤獄”の状況を史料を多数引用しながら詳細に述べて『海瑞罷官』に描かれた状況は確かに当時の歴史的事実と合致するものであることを明らかにした。同時に「この戯曲は1959年末から1960年11月にかけて書かれたのだが、『北京文芸』での発表、北京京劇団の上演は1961年初頭のことであり、単行本出版はこの年の8月である。（中略）この戯曲は何を“反映”しているのか。海瑞の何を“学習”するのか。この“反映”“学習”が党と国家、人民の社会主義事業に何と大きな損失をもたらしたか、言わずともわかることである」と述べ、姚文元の批判に屈服した自己批判を述べた。

ここで注意しておきたいのは、姚文元は「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」の中で『海瑞罷官』は彭德懷罷免弾劾を意図した劇だとはまったく述べていないことである。これは、『海瑞罷官』での海瑞罷免が悪徳官僚の陰謀による隆慶3年冬（1570）のものであり、皇帝を怒らせたことによる嘉靖45（1566）年の罷免ではないことから当然のことであった。

しかし事態の進展は、呉晗の予想をはるかに超えるものであった。毛沢東は呉晗の自己批判が発表される前の1965年12月21日に、すでに陳伯達、胡繩らとの談話の中で「姚文

元の文章もいい。名指しした。演劇界・歴史学界・哲学界への衝撃はとても大きい。しかし急所にあたってはいない。急所とは“罷官”だ。嘉靖皇帝は海瑞を罷免した。59年我々は彭徳懐を罷免した。彭徳懐も“海瑞”である」<sup>(28)</sup>と述べていたのである。

すでにみたように、『海瑞罷官』での海瑞罷免は嘉靖帝による罷免ではない。それにもかかわらず、毛沢東は『海瑞罷官』と嘉靖帝の海瑞罷免、更に彭徳懐罷免を強引に結びつけたのである。毛沢東は『海瑞罷官』の内容は知っていた筈だが<sup>(29)</sup>、この時の毛沢東にとっては『海瑞罷官』が少しでも彭徳懐罷免を連想させるものであればそれでよかったのである<sup>(30)</sup>。毛沢東のこの発言は、それ自体を取り出せば、まったく牽強付会としか言いようがない。薄一波によれば、康生が毛沢東に『海瑞罷官』と彭徳懐罷免を結びつけるよう示唆したという<sup>(31)</sup>。

毛沢東はこれ以前に1962年9月中共8期10中全会で「小説執筆を利用して反党活動をおこなうのは一大発明である」と述べ、李建彤の小説『劉子丹』と高崗問題を強引に結びつけ、習仲勲らを失脚させていた<sup>(32)</sup>。これも康生が毛沢東にメモを渡し毛がそれを読み上げたものだという<sup>(33)</sup>。文革前夜の『劉子丹』事件に始まり、文革中には1973年から74年の批林批孔運動中の儒家を保守派、法家を革命派に見立てた儒家批判、1974年絶対音楽（無標題音楽）批判、1975年水滸伝批判などの文芸作品、古典著作と当面の政治問題を無理に直接結びつける一連の批判運動が大規模に行われていた。さらに毛沢東は劉少奇、林彪その他政敵追い落としのため直接彼らを強引に批判した発言を何度も行っている<sup>(34)</sup>。そのような絶えまない牽強付会の批判文章、発言の中に毛沢東の『海瑞罷官』批判発言を置いた時、違和感は感じられない。もし毛沢東が真に海瑞と嘉靖帝・彭徳懐を結びつけようとするなら、『海瑞罷官』ではなく『海瑞上疏』を批判対象に選ぶ筈だが、上海上演の『海瑞上疏』では彭真・劉少奇追い落としに結びつけることは不可能であった。1965年末には、中国共産党も中国社会も毛沢東の「無法無天」をほぼ無条件で受け入れるところまで、毛沢東への個人崇拜あるいは個人迷信は進んでいたのである。あるいは、1960年代から70年代の毛沢東らは、目的達成の為に事実のねじ曲げをも厭わない批判を繰り返しおこなっていたため、逆に『海瑞罷官』などは自己を批判していると錯覚する思考形態に陥っていたのかもしれない。

そして毛沢東の談話内容は『海瑞罷官』に対する正しい批判だと受け止められ、『海瑞罷官』は彭徳懐解任を実行した毛沢東を風刺・影射した劇だという印象が急速に形成されていった。“罷官”が『海瑞罷官』の主要な政治問題だという批判は、公開發行の文章では思彤（王若水）「呉晗同志の挑戦を受け入れて」<sup>(35)</sup>からであるが、毛沢東の談話も文革中に紅衛兵・造反派の大字報などで繰り返し伝えられた。

呉晗が毛沢東の『海瑞罷官』と彭徳懐罷免を結びつける談話内容をいつ知ったか、どのような感想を抱いたかはほとんど明らかになっていない。呉晗自身は影射の問題について、彭徳懐とは面識がなく、『海瑞罷官』執筆にあたって彭徳懐について考慮したことはないと言っていた、と伝えられる<sup>(36)</sup>。しかし、もはや呉晗に論理的な反論が許される状況ではなかった。その後の呉晗の運命は、第一節で述べた通りである。呉晗は、無から有を生む批判内容と毛沢東の権威による反論不能の状況に、強い絶望感と不条理感を抱きながらつるし上げの日々を過ごすしかなかったと思われる。

呉晗やその家族だけでなく、『海瑞罷官』上演関係者も強く攻撃された。主役を演じた北京京劇団の馬連良は、文革初期の1966年12月に早くも逝去している。上海で『海瑞上疏』を上演した周信芳も、文革中強く批判され1975年非業の死を遂げた。

1976年10月に文革が終結し、1978年5月からの「実践は真理を検証する唯一の基準である」キャンペーンで文革や毛沢東への批判的検討が開始され始めた後、呉晗一家でただ一人生き残った息子の呉彰は、1978年8月呉晗の名誉回復を要求する。しかし、この段階で届いた專案組の結論は、呉晗への批判は取り消さず人民内部矛盾として取り扱う、というものだった。呉彰はその結論の受け取りを拒否し、名誉回復を再要求した。11期3中全会で毛沢東批判が公式に解禁された後の1979年7月、中共北京市委は元の專案組の結論を破棄し、呉晗の名誉回復を決定した。同年9月14日、呉晗、袁震の盛大な追悼会が開催された。

『海瑞罷官』も呉晗の正式の名誉回復に先立って1979年2月3日に北京京劇院（北京京劇団の後身）によって東風劇場（吉祥戲院が文革中に改名）で再上演された。上演広告によれば、出演俳優は趙世璞、羅長徳、王樹芳、李冬梅らであった。1979年2月4日付『北京日報』の報道に拠れば、主な配役は、海瑞：趙世璞、徐階：羅長徳、趙玉山：呉富友、李平度：楊鳴孝、洪阿蘭：徐麗娟、海母謝氏：王樹芳、海妻王氏：李冬梅、徐瑛：殷金振、王朋友：郭韻発であった。北京京劇院は、過去の上演録音をもとにわずか20日程度の稽古で新作同様になじみがないこの劇を上演したという<sup>(37)</sup>。1978年12月の中共11期3中全会を受けて、上演が急遽決定されたことがわかる。翌2月4日の『北京日報』は第4面全ページを使って再演『海瑞罷官』舞台写真を掲載した。当時の『北京日報』は4面しかなく、いかにこの再演が重視されたかを示している。戯曲も同年3月再版された。

## V 『海瑞罷官』の内容と芸術価値

呉晗個人への名誉回復は果たされ、彼自身への歴史的評価も一部に議論を残しながらもほぼ定まった。しかし呉晗の運命を定めた『海瑞罷官』に対する評価はまだ定まっていな

い。特に日本では、『海瑞罷官』の内容すら正しく知られていないことはすでに述べた通りである。『海瑞罷官』は全九場の新編歴史劇であるので、今日定本となっているテキストに基づき、『海瑞罷官』のあらすじを各場ごとにまとめておくことにしよう。

### 1. 民憤

明隆慶3（1569）年清明節の華亭県（現在の上海市松江区に相当）。農民の妻洪阿蘭（31歳）と娘の趙小蘭（16歳）が洪阿蘭の夫の墓参りに来ている。夫は地主に騙され土地を取り上げられ、憤って病気になり死んでしまったのである。そこへ、官僚で地主の徐瑛（約40歳）が通りかかり、趙小蘭の美しさをみて、屋敷に連れて帰り妾にしようとする。洪阿蘭の父趙玉山（65歳）は趙小蘭を守ろうとするが、徐瑛の手下に殴られ、趙小蘭も連れ去られる。洪阿蘭は華亭県知県の王明友（40歳）に訴えるが、確かな証拠があるかと相手にされない。

### 2. 審案

それから1ヶ月後。徐瑛は知県に金200両、知府に金300両を対策として送る。趙玉山、洪阿蘭は大勢の村民を証人に徐瑛を訴え、王明友は裁判をおこなう。徐瑛は、清明節は一日中城内の学者（生員）の家において城外には出ていないと偽りの弁論をおこなう。徐瑛に買収された王明友は、逆に趙玉山に郷官を誣告したと八十たたきの刑を宣告し、ただちに執行する。趙玉山は死んでしまう。洪阿蘭は王明友を罵りながら退場。そこへ、海瑞が巡撫に任じられまもなく当地に赴任するという通知が届き、王明友は驚く。

### 3. 上任

6月上旬。蘇州城外。まもなく赴任する海瑞の出迎いで、蘇州知府鄭愉（55歳）はじめ当地の官僚が集まっている。噂話の中で、海瑞の人物や経歴が紹介される。海瑞は民衆から海青天と呼ばれている。

海瑞は平服で、母謝氏（71歳）、妻王氏（30歳）と召使いしか連れていない。蘇州に至る途中で洪阿蘭や村民に出くわす。新任の巡撫海瑞は清廉な人物と聞いて蘇州府へ行き巡撫に訴えようとしているのだ。洪阿蘭らは海瑞が誰かわからないまま訴えの内容を話し、海瑞はあらましを把握する。

### 4. 見徐

前場の10日後、徐階の家。徐階（75歳）は徐瑛の父で、かつて首相を務め、現在は引

退している。徐階は海瑞が嘉靖帝の怒りに触れ投獄され処刑されようとした時、とりなしてひとまず嘉靖帝に処刑を思いとどませた恩人である。海瑞は徐階を訪ね、徐瑛の事件を徐階に問う。徐階は驚くが、海瑞からもし事実だったらと問われ、その時は法に従って処理してよいと答え、それを聞いた海瑞は立ち去る。海瑞が去った後、徐階は徐瑛を呼び、海瑞の話が事実であることを知る。徐階、徐瑛は対策を相談する。

## 5. 母訓

前場の3日後、巡撫住居内。かつて自分を助けてくれた徐階の子の事件をどうするべきかと悩む海瑞に、母の謝氏は、国法に基づくことなら躊躇うなと海瑞を励ます。

## 6. 断案

前場の翌日、巡撫役所の大堂。海瑞は諸官を集め徐瑛の裁判を始める。徐瑛は召使いの徐富に学者の服を着せ学者に偽装して、清明節に徐瑛は確かに自分の家にいたと偽証させる。しかし召使いは訊問の中でボロを出し、学者を騙っていたことを自ら暴露してしまう。海瑞に即刻処刑だと脅された召使いは、皆の前で真相を語ってしまう。海瑞は徐瑛、王明友に死刑、他の者にふさわしい刑を言い渡す。また集まっていた庶民の求めで、役人が没収している田を庶民に返すようにとの布告を出す。

## 7. 求情

前場の3日後、巡撫の役所。息子徐瑛の死刑判決を聞いた徐階は海瑞と面会し、かつて海瑞を助けたことも持ち出して、徐瑛の減刑を頼む。海瑞は取り合わず、更に徐家が民衆から取り立てた土地20万畝も返還するようにと命令を出す。徐階は、おまえがどんな退場をするか見ている、と捨て台詞を吐いて退場する。

## 8. 反攻

前場の翌日、徐階の家。徐階は友人たちといかにして海瑞に反撃するか相談している。徐階の宮廷での関係を生かし、高官に金を送り海瑞を左遷させることにし、友人の一人が使者としてただちに北京に向けて出発する。

## 9. 罷官

前場から5ヶ月後の秋のある日。巡撫役所の大堂。海瑞は、死刑執行を批准する朝廷の朝旨がすでに下りたと徐瑛、王明友に通告する。そこへ新任の巡撫戴鳳翔（50歳）が到

着する。徐階の工作が功を奏したのだ。海瑞はなぜ自分を解任するのかと尋ねると、戴鳳翔は民衆や地方官を虐げているからだ、と答える。海瑞は憤慨するが、どうすることもできない。徐階はそれみたことかと海瑞を嘲る。そこへ、役人が徐瑛ら死刑執行の時間が来たと告げる。戴鳳翔は徐瑛、王明友死刑取り消しの朝旨がすでに下りまもなく到着すると海瑞に説明するが、海瑞は巡撫の大印と先の朝旨があるから命令できると言い放つ。戴鳳翔は、そんなことをしたら後でどうなるかわかっているのかというが、海瑞はそれを振り切って死刑執行の命令を下す。死刑執行の音が聞こえた後、巡撫の大印を戴鳳翔に引き渡そうとする。呆然とした戴鳳翔、徐階と大印を掲げる海瑞の立ち姿で劇は終わる。

『海瑞罷官』の上演、出版情況の概略は第2節で述べた。『海瑞罷官』の初演後、北京の新聞雑誌には上演を賞賛する劇評がいくつかに掲載された。たとえば、繁星(廖沫沙)「“史”と“戯”－呉晗『海瑞罷官』上演を賀す」<sup>(38)</sup>は、「私は、あなたが書いた『海瑞罷官』は、“史”と“戯”という二つの門戸を打破し始めた、“史”の家から“戯”の家に踏み込んでいった、と考えている。これはたいへん難しく創造的な仕事である」と高く評価している。しかし、この廖沫沙の評に代表的なように、劇評は著名な歴史学者である呉晗が畑違いの京劇戯曲執筆に手を染めたことを賞賛するものが大半で、戯曲や舞台の芸術性を分析したものは少なかった。劇評などでの評価が高かったにもかかわらず、すでに確認したように上演はそれほど長く続かなかつた。呉晗自身もこのことを認めている<sup>(39)</sup>。

『海瑞罷官』の上演状況について、演出にあたった王雁が45年後につきのように回想している。

当時、観客は観劇した後、それほど強い反響はなかった。特に京劇のマニアックなファンがそうで、京劇芸術上ではそれほど大きな突破はないと感じた。しかし、俳優の顔ぶれはかなりしっかりしていると皆は一致して感じていた。(中略)観客は、彼らの演技にはかなり満足した。(中略)しかし、歴史界、教育界、文芸界などのインテリ階層の反響は相当に強烈だった。呉晗は歴史学者、副市長として京劇戯曲を書くことができた。たいへん貴重であり、一致して新鮮だと感じた。<sup>(40)</sup>

この回想は、各種の情況からみて事実に近いと考えられる。『海瑞罷官』が好評だったのは歴史学者が戯曲を書いたという珍しさと馬連良はじめ北京京劇団の俳優たちの力量によるものであり、戯曲の芸術性ではないということである。

文革終結後、北京京劇院『海瑞罷官』再演は、文革終結直後であり多くの人の関心を引き

断続的ながら1ヶ月以上の連続上演となった<sup>(41)</sup>。しかし、その後は上演されない。記録に残る限りでは、1996年の上海・逸夫舞台が組織した上演と1999年北京京劇院台湾公演の際2ステージ上演された程度である<sup>(42)</sup>。

戯曲は上演によって芸術的に完成される。ほとんど上演されない戯曲は、芸術上の弱点があると判断しないわけにはいかない。

今日、戯曲『海瑞罷官』を読んでまず感じられるのは、登場人物の多くが概念的だということである。農民の洪阿蘭、趙小蘭、趙玉山や悪徳官僚の徐瑛らがそうである。彼らは貧しく純粋な農民と邪悪で好色な悪徳官僚という概念がまずあって、それに基づいて作られた人物という印象を受ける。冒頭の農民の娘趙小蘭が地方官の徐瑛に連れ去られ抗議する父親趙玉山が手下に殴られるという場面は、後の革命模範劇の一つ『白毛女』の冒頭を連想させる。この場面で趙玉山は徐瑛に向かって「おい！黙れ！徐瑛、私は貧しいが志は貧しくは無いぞ。私は人売りはしない。早く帰れ、出て行け！」<sup>(43)</sup>とどなりつけるが、明代に、農民が地方官を呼び捨てにし、対等の口がきけたのだろうか。この場面は、当時すでに概念化していた農民像に基づいて書かれた典型的場面のように思える。

劇全体をみても、筋が説明的で、最後の「罷官」の場を除いて<sup>(44)</sup>劇的盛り上がり弱い。第六場「断案」など、ニセ学者の人物像が単純すぎて、ボロを出してしまう場面が子供だましにみえてしまう。

今日『海瑞罷官』を通読しても芸術的感銘をほとんど受けない。読んで芸術的感銘を与えない戯曲が、俳優たちに上演意欲をかき立てさせることは、もっと困難であろう。

## 結 語

---

呉晗『海瑞罷官』は、演劇に詳しくない歴史学者が外部（北京京劇団）の依頼を受けて無理を押しつけて執筆した戯曲であった。『海瑞罷官』の芸術的成果はそれほど高くなく、学者の手すさびとして、本来は時間の経過と共に忘れられていくべき作品であった。しかし、姚文元「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」に始まる一連の政治的批判、特に毛沢東の恣意的な批判とそれが引き起こした政治、社会状況は、『海瑞罷官』を永遠に中国史と中国演劇史に残る作品とし、『海瑞罷官』は呉晗の代表作となってしまった。しかも有名であるにもかかわらず、ほとんど読まれず上演もされないのである。呉晗にとっても残念なことである。

『海瑞罷官』に今日も芸術上の意義があるとすれば、それは学術文化が極めて不正常的な状態にあった時代に文学芸術作品が理不尽な扱いを受けた不幸な典型例ということだと思



われる。『海瑞罷官』をそのような作品として記憶しその内容とそれを巡って引き起こされた状況を正確に伝えていくことが、状況の再現を防ぐことに繋がっていくだろう。

【付記】 本稿は、京都大学「アジア・コア」事業による研究成果の一部である。

## 註

- (1) Wu Han: ご・がん (晗は音読み・漢音では「かん」だが、現在の日本では「ご・がん」という読みが定着)。
- (2) CNKIで「海瑞罷官」をキーワードに検索すると284本の論文がヒットする(2015年5月6日確認)。
- (3) 西村成雄、国分良成『党と国家 政治の軌跡』岩波書店、2009年、133-134頁。この部分の執筆は国分良成。
- (4) 久保亨『社会主義への挑戦』岩波新書、2011年、153頁。引用文中の1959年は1961年の誤り。
- (5) 以下の呉晗の略歴は、主に蘇双碧・王宏志『呉晗伝』(増補版)上海人民出版社、1998年; 宋連生『呉晗の後二十年』湖北人民出版社、2009年、による。
- (6) 宋連生『呉晗の後二十年』による。定陵発掘は考古学技術が未熟なまま発掘したため大量の文物破壊を招いたこと(これ以後中国政府は今日に至るまで古代皇帝陵の発掘を許可していない)、北京城壁取り壊しは、経済建設優先の古建築破壊。
- (7) 「在第一届全国人民代表大会第四次會議的發言 我憤恨 我控訴! 呉晗的發言」『人民日報』1957年7月7日。
- (8) 宋連生『呉晗の後二十年』。中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』(全6巻)中央文献出版社、2013年、には、関係する記述は見当たらない。
- (9) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』第4巻、11-12頁。
- (10) 宋連生『呉晗の後二十年』。
- (11) 宋連生『呉晗の後二十年』。『毛沢東年譜』には、関係する記述は見当たらない。
- (12) 宋連生『呉晗の後二十年』。1959年9月、1959年末とする記述もある。
- (13) 田耕「〈海瑞罷官〉導演談〈海瑞罷官〉」(『炎黄春秋』2006年第5期)によれば、植物学者の蔡希陶。この文章は『海瑞罷官』演出の王雁への採訪録。呉晗、馬連良はじめ『海瑞罷官』上演関係者がほとんど文革中に逝去している中で、実情を知っている者の記録として重要である。
- (14) 田耕「〈海瑞罷官〉導演談〈海瑞罷官〉」。
- (15) 主な劇評は次の通り。  
繁星「“史”和“戲”一賀呉晗的『海瑞罷官』演出」『北京晚報』1961年2月16日。  
常談「從“兄弟”談到歷史劇的一些問題」『北京晚報』1961年3月9日。  
史優「也談歷史劇」『北京晚報』1961年3月17日。  
鄧允健「評〈海瑞罷官〉」『北京文芸』1961年3月号。  
曲六乙「羞為甘草劑，敢做南包公—讀〈海瑞罷官〉散記」『北京文芸』1961年3月号。
- (16) 田耕「〈海瑞罷官〉導演談〈海瑞罷官〉」。7月とする記述もある。

- (17) 歴史劇論争を概観した日本の論文に、岩城秀夫「最近の中国における歴史劇論争について」(『日本演劇学会紀要』5号、1963年)がある。
- (18) 「談歴史劇」『文匯報』1960年12月25日。
- (19) 『歴史劇論集第一集』267頁。
- (20) 『歴史劇論集第一集』268頁。
- (21) 『歴史劇論集第一集』268頁。
- (22) 『歴史劇論集第一集』268-269頁。
- (23) 「再談歴史劇」『文匯報』1961年5月3日。
- (24) 『歴史劇論集』283頁。
- (25) 宋連生『吳晗の後二十年』は、吳晗も民国期には国民党・蒋介石を影射・風刺する歴史論文を発表したことがあることを指摘しているが、社会情況が大きく変わった1960年代では、吳晗に影射の意図はなかったと思われる。
- (26) 「評新編歴史劇“海瑞罷官”」。
- (27) 吳晗「關於〈海瑞罷官〉的自我批評」。筆者がみたのは《吳晗全集》収録テキスト。
- (28) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』第5巻、547-548頁。
- (29) 蘇双碧・王宏志『吳晗伝』(1998年版)325頁に引用された袁溥之「憶吳晗同志之二三事」(『北京盟訊』1981年第3期)によれば、毛沢東は『海瑞罷官』上演後たいへん喜び、主演の馬連良を自宅に招いて食事し、馬連良に『海瑞罷官』の一曲さを唱うよう依頼し、吳晗の戯曲も称賛したという。ただし、『毛沢東年譜』には毛沢東の『海瑞罷官』観劇、馬連良との会食に関する記載はない。同年譜によれば、毛沢東は『海瑞罷官』上演期間中の1961年2月～4月は北京にいなかった。『北京盟訊』1981年第3期は、北京・国家図書館に所蔵されておらず、本稿執筆時には未見。毛沢東が『海瑞罷官』を実際に観劇したか否かの判定は今後の課題としたい。
- (30) 小山三郎『現代中国の政治と文学 批判と肅清の文学史』第七章「吳晗と『海瑞の免官』に関する考察」(東方書店、1993年)は、吳晗と毛沢東の海瑞宣伝に関する意図が一致していなかったことを指摘しているが、文革期の段階では毛沢東の『海瑞罷官』理解や解釈を厳密に考察することは無意味に近いと思われる。
- (31) 薄一波『若干重大決策与事件的回顧』下巻(党史出版社、1993年)。
- (32) この事件については、石川禎浩「小説『劉志丹』事件の歴史的背景」(石川禎浩編『中国社会主义文化の研究』(京都大学人文科学研究所、2010年)が詳細な研究をおこなっている。
- (33) 薄一波『若干重大決策与事件的回顧』下巻。
- (34) 『歲月艱難 吳法憲回憶録』(香港：北星出版社、2007年)など林彪派將軍回想録に登場する文革中の毛沢東は、林彪事件を頂点とした政敵追い落としのために強引な批判を何度もおこなっている。
- (35) 「接受吳晗同志的挑戰」『人民日報』1966年1月13日。
- (36) 宋連生『吳晗の後二十年』。
- (37) 「撥乱反正貫徹百花齊放推陳出新的方針 歴史劇〈海瑞罷官〉重新公演」(『北京日報』1979年2月4日)。
- (38) 「“史”和“戲”一賀吳晗的『海瑞罷官』演出」。
- (39) 吳晗「關於〈海瑞罷官〉的自我批評」。

- (40) 田耕「〈海瑞罷官〉 導演談〈海瑞罷官〉」。
- (41) 『北京日報』上演広告によれば、このあと2月11日、3月1日、2日、19日、20日、23日、24日、27日、28日、30日、31日に上演がおこなわれている。上演広告でみる限り、4月以降は上演はない。
- (42) 田耕「〈海瑞罷官〉 導演談〈海瑞罷官〉」およびインターネット上での上演消息検索。『海瑞罷官』上演の映像資料は、DVD『海瑞罷官』（天津市文化芸術音像出版社、2001年）がある。これは馬連良ら初演舞台の音声録音と天津京劇院の俳優によるスタジオ上演の演技映像を組み合わせた（原音配像）もの。天津京劇院が『海瑞罷官』を公演したかは不明。このDVDの内容は土豆網など中国の動画サイトでみることができる。
- (43) 原文は“趙玉山 哇！住口！徐瑛，我人窮志不窮，我不販賣人口。快走，滾！”（『吳晗全集』第10巻、29頁）。
- (44) 「罷官」の場が劇的にある程度優れていることは、曲六乙「羞為甘草劑，敢做南包公— 讀〈海瑞罷官〉散記」、鄧允健「評〈海瑞罷官〉」（いずれも『北京文芸』1961年3月号）に指摘がある。

